



# 工 化 時 報

第 2 1 号

## 目 次

工化会にかかわって (滝戸俊夫)	P. 2~3
第4回日本大学理工学部産学技術交流会	P. 4~5
シリーズ OBからの大学への提言	P. 6~7
文部科学省ハイテク・リサーチセンター整備事業 ナノサイエンス研究プロジェクトの継続が決定	P. 8
平成16年度就職状況	P. 9
工化会事業報告	P. 10~11
平成16年度新任紹介	P. 12
クラス会・同窓会の報告	P. 13~14
学生編集委員のページ	P. 15~16
会費納入者一覧	P. 17~19
お知らせ	P. 20

## 工化会にかかわって

理工学部次長  
滝戸 俊夫(昭和45年卒業)



### ・学生会員(会計委員)だったころ

大学に入学してから40年近くが経つがほとんどの期間、工化会に関係していた。教養課程の1年間を文理学部で過ごしてから駿河台校舎に移行した。当時は、工化会に学生会員制度があり2年次にクラス幹事になったことからすぐに学生幹事として活動した。そのとき以来、工化会と係わっている。

学生幹事の仕事は主に学生会費50円(安ラーメンが50円であった)の徴収であった。この会費で学生名簿が作られていたのを知ったのは随分経ってからのことである。

そんな訳ですと会計(徴収人)のようなことをやってきたので大学院生になると学生でありながら会計幹事として年度の収支決算書を作成した。幹事会や総会へも出席し、会計報告までした。収支決算書は会計幹事をされていた高等工学校卒業の大先輩、故上野利夫さんが良く見てくださり、さらに食事までご馳走して頂けるので、1年の内でこの時期は待ち遠しい時でもあった。記憶によれば工化会の総資産も約40万円程度であったため活動は出来ず現金はあまり動かない(動けない?)ので会計報告上の苦労はそれほどでもなかった。しかし大先輩や偉い先生方の前で収支報告をするのはいささか緊張したものである。しかしこの程度の資産でで同窓会が運営できたから不思議である。

### ・会報委員だったころ

2年生のガイダンス時に工化時報が配布された様に記憶している。そして3年生(昭和43年)の時には理工学部もご他聞に洩れず大学紛争に突入した。大学改革が議論される中で、校舎はロックアウトされ、学生間の情報も錯綜し、まとまりが取れなかった。工化時報は全く忘れ去られた。その中であって教員、学生、院生、卒業生それぞれの立場から日大紛争についての考え方を聞き、偏りのない意見を総合的に掲載することで、大学改革が本来進むべき道を見つけ出すと共に、紛争に無関心の学生にも現状を理解してもらうことに主眼を置いた工化時報(紛争特集)を学生自身の手で発行した事がある。当時、3年の学生幹事(紛争突入直後にリコールされた)の一人であった永島一男君が中心となり、滝戸を含めた幹事会メンバーが、記事を集め、永島君がガリを切った。いわゆる「ガリ版刷り」である。何部発行し、どれ程の会員に読んでもらえたかは記憶にないが、このような内容で2度ほど発行した。残念ながら記事に対する反響は届かなかったが、この発行を実現させた我々学生にはそれなりの充実感があった。昭和44年授業は再開されるも、紛争が契機となり工化時報は約15年間の沈黙期間を迎えることとなった。

昭和58年春のことである。故上野先生(電気化学研究室)より工化時報を復刊するので手伝って欲しいとの打診を受けた。同僚の澤口さん(澤口孝志教授)、櫻川さん(櫻川昭雄短大教授)と共に工化時報の歴史について話を聞いた。過去に、期間をおいて2度ほど会誌を発行した事があり、初期の発行時には工化会報(学術的な論文集)、と工化時報(学科の出来事、卒業生の記事などが中心)を発行したこと、編集活動は活発に行われ年に数回発行していたがいずれも数回の発行で挫折しその後は発行されていないこと、紛争後に入学そして卒業した学生は同窓会の存在すら知らず全く仲間意識が乏しくなってしまったことを嘆かれた。そして、前回の挫折の経緯は不明だが、勢い込みすぎたのではないかと予想されるため、今回こそは何年も続くような工化時報にしたいと熱弁を振るわれた。確かに紛争後の工業化学科にはクラス幹事はいても工化会の存在すら知らない学生ばかりになっていた。上野先生の申し出に否やは無く我々も復刊に協力することに同意した。

そこで新生工化時報の題字は第1回工業化学科卒業生であった松本太郎先生にお願いした。内容は、当分の間、在校生に工化会の目的と意義を広報することを基盤とすることを決定した。学生の工化会に対する意識向上のため、会誌の記事集めや編集に協力してもらうことを柱にした。学生幹事から学生記者として3年生、4年生を募り、研究室訪問と銘打って教授にインタビューしてもらった。学生は緊張したが教授にとっては楽しい訪問のようであった。次に、大学院生を強引に引き込んで学科編集委員(滝戸・澤口・櫻川)と一緒に編集をさせた。取材記事を業者にタイプ印刷してもらい、A3用紙に上手く記事が組み込めるように用紙に版下枠どおりに貼り付ける細かい作業であった。時として完成間近で上手く組めないことに気がつきやり直しという目にも何度かあった。とにかくパーソナルコンピューターなどまだ使える時代ではなかったのである。やっと完成した版下をコピー印刷して完成を迎えるのである。こんな苦労の末に新生工化時報第1号が完成したわけである。発行部数は2000部、昭和59年3月のことであった。この苦労の末の完成時の感動はまた格別のものがあつた。そして学生、大学院生の諸君のおしめない協力がなければこの新生工化時報第1号は決して日の目を見なかったのである。

今年は工化時報21号の発行(Web版)とのことである。先の発行から考えると、今回の工化時報は20年とよく続いている。配布対象も在校生だけでなく卒業生を含む全会員へと拡大された。学生記者の数も増加し、工化時報の内容も良い方向に変貌してきている。10号までで手を引いてしまった私にはあまり大きなことを言えないが、編集委員の努力は並大抵のものでなかった。しかし、あまり気張らなかつたことが良い結果をもたらしたものと思う。卒業生の読者諸氏には物足りなさも残る部分もあるであろうが、良い誌面にしていくためには、卒業生の物質的、精神的協力がなくては叶わないのである。

**第4回 日本大学工学部産学技術交流会2004**

実行 WG 委員長 澤口孝志

工学部理工学研究所分析センターの主催，(社)日本化学会，(社)高分子学会，(社)化学工学会，(社)応用物理学会，(社)日本セラミック協会，日本大学産学連携知財センター(Nubic)，工学部物質応用化学科，工学部校友会工業化学部会(工化会)後援による第4回産学技術交流会2004が平成16年11月19日(金)(14:00~18:15)駿河台校舎1号館CSTホールにて催された。

工学部長 小嶋勝衛 教授の挨拶の後，“自然科学のさらなる連携・融合とアプリケーション開発を求めて”を主テーマに，産学連携の世界的ビッグタグとして，まず，2002年にノーベル物理学賞を受賞された東京大学名誉教授 小柴昌俊 先生(財)平成基礎科学財団理事長)から，“ノーベル賞への道～産学連携が見つけたニュートリノ～ニュートリノ天体物理学の誕生”のテーマで日本発「ニュートリノ天文学」について解り易いご講演を賜った。続けて，浜松ホトニクス(株)理事電子事業部営業部長 袴田敏一 氏から“光検出からニュートリノ発見までの道～世界最大径の光電子増倍管～”と題して，ニュートリノ検出のための直径20インチのホトマル開発秘話をご披露いただいた。アカデミアがなすべき基礎研究を産業界が支援する産学連携の一つの範，および産学連携の原点である浜松ホトニクス(株)晝間 社長との人間味溢れる交流が明解に示され，4回目を迎えた本学部が目指すべき産学連携の道標として，また，参加された産業界の方々，教職員，学生のモチベーション高揚に大いに役立ったとWGメンバーとともに素直に喜ぶたい。

本学部の研究成果として，①日大理工発 Nubic 経由ベンチャー((株)i2S2 代表取締役 栗原義)；②経済産業省・NEDOによる国家プロジェクトーナノメーター制御光ディスクシステムの研究開発(磁区応答3次元光メモリー技術)～次

世代高密度光磁気ディスク：500円玉サイズの光ディスクに2時間の動画記録実現を目指して～（理工学部 電子情報工学科 伊藤彰義 教授）；③ベニカミキリフラスを有効成分とする皮膚外用薬（理工学部 物質応用化学科 秋久俊博 教授）；④真珠核の非破壊検査装置の開発（理工学部 電気工学科 鈴木薫 助教授）；⑤高付加価値高分子原料の製造と応用～実用化に向けて（理工学部 物質応用化学科 澤口孝志）の講演，および5階 CST ギャラリーにてポスター発表33件（化学14件，電子5件，電気8件，精密3件，化学・物理1件，本部1件，企業1件）が活発な意見交換のうちに行われた．講演会には，合計328名（一般101，教員70，学生157）の参加があった．小柴先生のご講演に対し2名の学生から質問あったことは特筆したい．

講演会后，懇親会（1号館2F カフェテリア 18:30～）が催された．理工学研究所長 大津岩夫 教授，理工学部工化会会長 藤池 誠治 氏のご挨拶に続き，理工学部次長 滝戸俊夫 教授の音頭で乾杯に移った．第1回から続いている理工学部校友会会長 安達 昭郎 氏の差し入れ「新作解禁：ボジョレーヌーボー」も手伝って，名刺・意見交換等のボルテージが高まり，議論沸騰いよいよ舌好調を迎えた20:00頃，理工学研究所次長 上坂 洋司 教授による中締め，安達氏による一本締めにて散会となった．

本会は社会に開かれた理工学部を指向し，平成13年に立ち上げたボトムアップ型産学連携です．本4回目は，いよいよ大学の第3の使命「社会貢献」を果たすためのシステム構築に向けた節目の会でしたが，成功裡に無事終了できたことは，ひとえに理工学部の関係系各位のご理解とご支援によるものであり，深く感謝申し上げます次第です．

日本大学理工学部産学技術交流会事務局

[sangaku@chem.cst.nihon-u.ac.jp](mailto:sangaku@chem.cst.nihon-u.ac.jp)

## シリーズ OBからの大学への提言

化学工学研究室 2002年修了 戸田篤志

2002年3月に大学院博士前期過程を修了し、製薬会社に勤務しています。今の仕事は薬効のある化合物に安全、かつ、効果的に薬の作用が出せるような処方設計をして、それを市場へ送り出すための工業化をする業務ですが、就職してからの3年間は学生時代よりも更に勉強の毎日であったと感じています。

製薬業界というのは患者さんによりよい品質の薬を届けるのが仕事です。少なくともアカデミックな気持ちだけでは研究が勤まりません。なぜなら、薬を扱うという性格上、厳しい法規制と高い倫理観を持って研究に望まなければならないからです。我々、製薬業界の研究者はこの気持ちを持って仕事に望んでいると思います。皆さんの中でもこの分野に興味を持つ方は多いかと思いますが、今の製薬業界は荒波に揉まれています。その中でも何か気概を持つ学生にこそ、これからの製薬業界に向かってきて欲しいですね。

就職活動をしていた頃の自分は本当にやりたい事をつかめずにいたような気がします。ただ、学部生時代にさんざん遊び、その反動で大学院時代に研究にのめりこむ生活は非常に充実したものであり、就職してからも自分自身でやりたい事を見つけられる自信はありました。皆さんはどのような学生時代を過ごしていますか？

学生時代にしか出来ないことはたくさんあり、少なくともそれは勉強だけではありません。バイトでも恋愛でもサークルでもよいと思いますが、何かに熱中することが大切だと痛感しています。人生の中で一番自由な時間が取れる学生時代に何もしなかった、もしくは勉強しかしていないというのはあまりにもったいなく、社会に出てから自分の視野の狭さに苦労することも多いのではないのでしょうか。大学という空間は非常に限定的ではありますが、一つのミニ社会なのかもしれません。そのミニ社会に埋もれることなく、次々と新しい和を作り出して行くことがこれからの社会人生活につながります。良い成績を取るだけ、あるいは熱中することに背を向けて一見クールな自分を作り出すのはやめて、新しい世界に飛び込んでみてください。必ず何かを見つけ出せるはずです。皆さんの今後のご活躍を期待しています。

**就職活動をされている後輩各位へ**

三井屋工業株式会社

取締役 石川公平 (昭和53年卒業)

勤務先の三井屋工業はトヨタ自動車の部品メーカーです。創業57年を迎え小さい規模ながら開発提案によってお客様に喜んで頂ける様日々努力しています。トランクルームの内装、タイヤの騒音を減らすライナーを繊維系の樹脂材料を使って生産しています。私は入社して27年になりますが主に生産技術、開発、営業などに従事してきました。昨年より工場を見るようになりトヨタ生産システムを猛勉強中です。就職活動をされているみなさんは自分の人生の中で大きな岐路に立っているのですが、出来るだけ有名な一流企業に入りたいと苦心していませんか。私が今になって考えると有名な一流企業と言われる会社に入社する事より自分にとっては今の会社が良かったと思っています。色々な分野の仕事をやる事が出来、自分の仕事の範囲が広く自分の色を出し易い環境があったからです。悪い面もあります、仕事を教えてくれる先輩が少ない事です。これは自分で考え、勉強する事で補って来ました。しかし一番良かったのはお客様に教えて頂いた事です。お客様に満足して貰える為にはどうすれば良いのかを導く為、お客様に事実を説明し解決する選択肢を並べお客様と真剣に議論する事によって得られた事です。この中でお客様の考え方、本当に望んでいる事は何か等を学びました。ただ、専門分野の技術的な課題はそうは行きません。ここでは材料メーカーや設備メーカーの方々に私が重要だと考えている事をしっかり伝え、提案を素直に聞き最後に自分で考え結論を導く方法で行いました。基本は、あまり駆け引きをせずに正直な気持ちで相手に接し素直に相手の話を聞く、その上で自分で良く考える事。これから社会に巣立っていく皆さんの心構えで“素直な気持ち”“自分で考える習慣”を持って仕事に向かって行く事を進めます。どんな仕事でも臆せずぶつかって行ってください。きっと良い結果が得られると思います。

産業廃棄物収集・運搬中間処理のスペシャリスト

株式会社 **三 栄 興 業**

〒341-0044 埼玉県三郷市戸ヶ崎3-302

60年卒 鈴木 義 弘

TEL 0489-55-1632 E-mail:sanei@pc-mind.co.jp

**文部科学省ハイテク・リサーチ・センター整備事業  
ナノサイエンス研究プロジェクトの継続が決定**

研究プロジェクト実行委員会  
委員長 澤口 孝志

理工学部では平成11年度から15年度までの5年間、文部科学省ハイテクリサーチセンター整備事業に採択された標記の研究プロジェクトを実施し、種々の興味深い結果を明らかにして来ましたが、審査の結果、このたびプロジェクトの継続が決定致しました。これは「アトムテクノロジーを指向したナノ構造融合化材料の創製」という課題について、物質応用化学科と物理学科が中心となり、自然界における精緻な構造形成を模倣した新規なナノ構造融合化機能材料を創製しようとするものです。今回は以前のプロジェクトで開発したナノ構造制御技術の深化を図るとともに、原子・分子1個1個を自在に操作する「アトムテクノロジー」にまで踏み込んだ研究をおこないます。期間は平成16年度から20年度までの5年間、予算総額1億3千万円で、物質応用化学科のテーマと担当者は次の通りです。

- 超臨界CO<sub>2</sub>流体によるナノコンポジットの創製とその機能発現(澤口)
- バイオミネラリゼーションを模倣した自己組織化膜と粒子の調製(安江、遠山)
- ゾルーゲル法によるナノコンポジットの調製(栗田、伊掛)
- 機能性バイオコンポジットのマクロ物性の評価とその応用(矢野)
- 超臨界CO<sub>2</sub>流体によるナノ構造制御(越智、栃木)
- 表面超分子化学の確立と単一分子デバイスへの応用(大月)
- カテナンの特性を利用した新規不斉配位子の合成(萩原)
- 生物資源を素材とした新機能性物質の設計と合成(浮谷)

このプロジェクトの実施にあたり、電子顕微鏡観察下での元素分析が可能なSEM-EDX(右図)、および電子顕微鏡観察用試料切片が高精度で作成できるウルトラミクロトームを新規に導入しました。本研究は科学的に極めて重要であるだけでなく、省資源、省エネルギー、地球環境保全の観点からも注目されています。





## 平成16年度 就職状況

学生の就職状況は、かつての大学紛争で著しく変化し、しばらくは厳しい就職戦線での活動を余儀なくされたわけですが、バブル経済とでもいいたしうか、求人先の多様化によって状況も好転しました。「この会社は給料がいいですか?」、「この会社の寮はきれいですか?」など、それまでの就職相談では考えられなかった学生さまさまの状況に変化して、就職指導はかえって難しい時期もありました。それがバブルが弾ける前後の平成3年頃までの状況だったと思います。しかし、世の中の不況が囁かれ始めた平成4年頃から就職戦線はまた厳しくなり、それに就職協定の廃止も加わって就職指導は以前よりも難しくなりました。その後、ここ数年前から求人の様式が変わってきて、自由応募が圧倒的に増えてきましたので、学生自身がインターネットで企業にエントリーするケースが多くなり、職種も多様化しつつあります。

いずれにしても就職戦線は今なお厳しいようです。しかし、昨今本学科の学生は健闘しているといえましょう。就職内定者の内訳は学生の性質上、化学工業関連の企業が多く、製造業が約30%(大学院だけでは70%)を占め、次いで情報・サービス業13%、商業10%となっています。大学院への進学者が急増し進学率は35%以上、その他教員・公務員が6%を占めています。就職決定率は、男女の区別なくほぼ100%に達しています。

このような状況に対応するため大学でも就職コンサルタントによる指導、就職セミナーの開催など随時学生の就職支援を行っています。特に、本学科では平成16年12月定年退職された村川信子主事の指導協力がこれまでの就職決定率のアップに大いに貢献してきました。その後、本学科には教授陣による就職指導委員会を設置し、平成17年4月からは就職事務の為の副手を配して高就職率を堅持できるよう体制を整えています。会員各位におかれましても今後のご支援ご協力くださいますようお願い申し上げます。

ポリオレフィン系コンパウンドの製造・販売

## 昭和化成工業株式会社

□本社・工場 〒348-8585  
埼玉県羽生市小松台1-603-29  
TEL 0485-61-5221 FAX 0485-61-5229

□技術・試験  
TEL 0485-61-5225 FAX 0485-61-5228

昭和53年卒

代表取締役社長 池本俊一

□東京支店 〒101-0032  
東京都千代田区岩本町3-3-2 アックス神田8F  
TEL 03-5823-1301 FAX 03-5823-1304

□大阪支店 〒532-0011  
大阪府大阪市淀川区西中島6-1-3 7st0新大阪第2c' #10F  
TEL 06-6307-2727 FAX 06-6307-2748

□名古屋営業所 〒450-0002  
愛知県名古屋市中村区名駅3-15-1 名古屋9'4th #2号館  
TEL 052-581-2211 FAX 052-581-2385

## 平成16年度工化会事業報告

平成15年度工化会通常総会は、駿河台校舎1号館の2階中会議室において平成16年5月29日(土)午後4時より、役員・会員61名の出席を得て開催された。議長には藤池誠治本会会長を選出し、各委員会の平成15年度事業報告および会計報告、ならびに平成16年度事業計画および会計予算案の審議を行い承認された。さらに、工化会会則の一部改正が承認された。人事は庶務委員であった秋久教授が平成15年10月に教室主任に就任したため庶務委員を退任し、新たに安江教授が庶務委員に任命され、また新任の吉川助手が会員委員に任命された。

総会終了後の恒例の懇親会は、1号館2階のカフェテリアにおいて午後5時から開催された。懇親会は52名の出席を得て、安達校友会会長に乾杯の発声を頂いた後、和やかな雰囲気で行われ、午後7時に閉会となった。

平成16年度工化会予算は収入が611万円(内訳は前期繰越金448万円、校友会割戻金40万円、会費100万円、その他23万円)、一方、支出は庶務費64万円、会員費22.8万円、会報費71.7万円(工化時報印刷・郵送費)の158.5万円を予定している。なお、例年と異なるのは会報費である。すでに、工化時報第20号にも掲載されているが、工化時報の発行および発送が工化会の財政を圧迫してきたため、本年度からは工化時報の印刷・発送を制限した。これにより、平成15年度の会報費の予算は332.7万円(決算は250.7万円)であったのがその1/4程度になった。

平成16年度における会員諸氏による会費の納入状況(平成16年4月16日～平成17年10月28日)は、納入者数450名、納入金額は121万円となっている。納入者の中には複数年度分の会費を納入された方や、寄付をお寄せいただいた方も多数おられるが、これらの方々への御礼も含め、御礼

は本号の会費納入者氏名一覧の掲載を持って換えさせていただきます。なお、本年度12月より寄付をしていただいた方には礼状を送付することにした。また、これまで送付していた振込用紙は寄付用なのか会費用なのか判断しづらいものであったため、来年度から送付する振込用紙では寄付および会費の区別ができるよう工夫をした。

昨年から各委員会の業務内容の確認を行い、効率よく、そして連携をたもつために学内委員会を開いている。これまで、会費を振り込んでいただいた会員氏名および金額などの把握が必ずしも各委員会にうまく伝達できていたとは言えず、会費を納入したのに会費納入者名簿に記載されていないなど会員の方からの苦情も聞かれた。これを改善するため、とくに本年度は会員の方から振り込まれた会費の把握について検討し、振り込み用紙の取り扱いなどの流れを明確化した。

最後に、平成16年度の工化会主催行事ならびに後援行事の概要を記載する。

- ①平成16年5月15日(土)14:00～16:00 第1回役員会
- ②5月29日 16:00～16:45 通常総会・懇親会
- ③8月1日(日)オープンキャンパス'04 (船橋校舎)
- ④11月19日(木)第4回産学技術交流会
- ⑤11月25日(木)第1回学内役員会 15:00～16:30

以上 庶務委員会

化粧品原料から製品まで 化粧品OEMメーカー

**東色ピグメント株式会社**

〒124-0012 東京都葛飾区立石6-37-14

昭和58年卒 代表取締役社長 **嶋原靖宏**

TEL03(3693)1050 FAX03(3693)1053

## 平成16年度 新任紹介

吉川賢治先生  
分析化学研究室 助手



はじめまして、平成16年度より分析化学研究室で助手を務めます吉川と申します。平成10年度に理工学部に入學以来、平成15年度の博士前期課程を修了するまでの6年間、物質応用化学科の諸先生方には大変お世話になりました。学生時代に培った知識及びティーチングアシスタント等で学生と触れ合う経験を通し、微力ながら後進育成等の一助になりましたらと思ひ、学生から教員になり現在へ至っています。現在の私の研究は、研究室共通のテーマである「微量化学成分の分析法に関する研究」の中で、分析法の一つとして高速液体クロマトグラフィーに着目した研究を中心に学生時代から継続して行っています。化学物質は極微量でさえ環境や生体系等に大きな影響を与え、新しい微量分析法の開発が必要である昨今です。現在まで諸先輩方が理工学部で築いてきた伝統を継承しつつ、微力ながら発展させていけるよう思う次第でありますので宜しくお願い致します。

## 退職にあたって

教室事務 村川 信子

昨年12月9日で定年になりました。

永い間、在職中は皆様には心温かいご支援を賜り心より厚くお礼を申し上げます。

短大応化を卒業して、企業に5年間勤めてから、故穴沢教授のお世話で、工業化学科の教室事務に採用され、40年間、主に学生の就職の仕事に従事してまいりました。

その間、学園紛争、オイルショック、バブル崩壊と就職に対して厳しい状況でしたが、幸い多くの卒業生と企業の方々のご協力とご支援をいただき、多くの学生が就職が決まり、大変助かり、深く感謝している次第です。

何時も、先輩が後輩の就職の面倒を親身になって見てくださることは、この仕事をして、日大の良さだと思つづく感じておりました。多くの学生とコミュニケーションを図り、相手の気持ちになって、就職のお世話をして、内定が決まった時の笑顔は、一生忘れることはないでしょう。

今でも多くの卒業生との交流が深まり、日大に勤めて、沢山の思い出は何事にも変え難い財産として私の心の中に残

改めて日大に勤めて良かったと幸せを感じています。  
これからは好きな編み物、手芸、帽子作りとの趣味を生かして人の和を広げてお役に立てればと思っています。

最後に卒業生の皆様のご健康とご発展をお祈り申し上げます。

## クラス会・同窓会の報告

### 有機合成化学研究室同窓会

有機合成化学研究室同窓会「P S会」第17回総会は平成16年11月13日(土)に東京御茶ノ水ホテル聚楽(千代田区神田淡路町)にて開催された。

P S会は昭和46(1971)年3月の有機合成化学研究室の卒業生が第1期であり、学部・大学院卒業生相互で企画・運営し、卒論あるいは大学院での指導を頂いた先生方に「特別会員」としてのご参加を頂いて活動している。

第17回総会は太田延幸新会長の開会挨拶で始まり、特別会員の板橋国夫先生、妹尾学先生、中沢利勝先生のご挨拶(山田翠先生はご欠席)に続き、大木雅夫前会長の乾杯の発声があつて懇談に移った。参加者は総勢90名で、ご家族同伴やお子様連れの会員もおられ、和気藹々とした雰囲気、懇談風景であつた。やがて恒例の記念写真撮影となり、特別会員の先生方を囲んでの撮影は学生時代を彷彿とさせる若々しい笑顔に満ちていた。名残惜しい総会は、「今年が年男」との板橋先生と、今年度から理工学部次長に就任された滝戸俊夫さんに花束を差し上げ、一言ずつご挨拶を頂き、更に磯良雄副会長の手締めと続いてお開きとなった。



### 工化35クラス会の開催

隔年で行っているクラス会を2004年11月12日に市ヶ谷私学会館で池村先生、板橋先生、和井内先生並びに市川先生のご出席を頂き賑やかに盛り上げました。卒業後45年を間近にして多くの同輩は定年後の癒しに多種再々の者もおれば、まだ現役続行中で鞭をうちうち仕事に励む輩あれば、一方、病に取り付かれ療養中の者も多くなってきました。

当日は池村先生の春の叙勲の晴れがましいお話に、また先生方の博識あるお話に感心いり申しました。いろいろ書くより先ずは当日の矢後君の自慢のデジカメによる記念写真をご覧ください。次回の2006年11月には是非出席を願います。(安達)



#### 高分子合成研究室卒業生の皆様 “平成17年度同友会開催のお知らせ”

高分子合成研究室は1972年に設立されてから2004年までに700名を越える卒業生を送り出しており、本年35期目の卒業研究生を迎えた。一昨年にリニューアルされた同友会は第3回目を2004年11月6日



(土) 母校1号館カフェテリアに100名を越える参加があり大盛況であった。豊富な人材ネットワークを気軽に活用できるサロン風産学連携拠点として益々重要視されはじめている。同日午後1時から総会が開催されるまでの時間で活動テーマとして掲げていた企業と学生を繋げる就職懇談会を開催し、数社の企業へ本研究室学生の就職が内定するという成果もあった。本会は、研究室の枠を超えたネットワークへの発展を強く願っている。興味ある方は研究室(矢野yano: 03-3259-0799; 澤口sawaguti: -0819; 萩原hagiwara: -0433; \*\*\*\*@chem.cst.nihon-u.ac.jp)にご一報を! 第4回は2005年11月12日(土) 日本大学理工学部1号館2階カフェテラスにて開催される。

(同友会役員 矢野彰一郎会長, 津野岳彦, 関口優紀および澤口孝志副会長, 木村文紀幹事長, 小笠原守人および鳴原靖宏会計, 中村信男および渡部武則監事)

## 学生編集委員のページ

### 「学校においての先生と学生のあり方」

現在の3年生から新カリキュラムへの移行に伴い3年生後期から卒業研究が始まっています。また、2月という時期だけに就職活動に関しても少し触れながら、これからの物質応用化学科の将来像について学生と先生を交えて討論会を開催しました。白熱した議論の一部ではありますが日頃私達の考え、先生方の思いについてご覧ください。

学生1「大学生活というのは専門知識を付けるところと思うのですが、それ以上に大切なのは人間関係だと思います。全国の色んな人と接する事で、見えていない世界が見えてくるように僕は思います。先生方は大学生活をどうお考えですか？」

先生B「やはり大学生活を過ごす中で化学を学びつつ、早いうちから自分は何に向いているのか？と自分を見つめ直すことが学生時代には大事だと思うよ。」

司会「学生時代は人間関係を築く時期でもあり、先生方も同じお考えのようですが、先生と学生のコミュニケーションが少ないと思うのですがいかがでしょうか？」

先生B「講義の後や研究室に積極的に来てくれて構わないと僕は思うよ。授業は多人数教育だけど、研究室は色々話し合う場であっても良いと思うなあ。」

学生2「しかし、研究室は研究をするところで将来の事を話す雰囲気ではないように思います。」

先生C「確かに研究をやってから言ってこいという気持ちはあるよ。」

学生3「そのガイドラインが難しいですね。」

先生C「学生の行動次第によるんじゃないかな。」

先生D「もっと早いうちから話をしたいね。今まで1～3年までは、一方的に教えられる立場だったのに、急に話をしに来て良いと言っても無理があると思う。現状として進路を考えた時、先生に聞いてみたいと思ってもうまく交流ができていない。研究室も終わりに差し掛かり、ようやく話せるようになる時期には就職活動は終わっているという状況だね。もっと身近な所でお互い歩み寄る必要があると思うな。研究室というよりもっと早い時期に。さもないとお互い不幸になる。」

先生A「そのような事は必要だと思う。こちらも遅くなって今更就職活動の相談をされてももう推薦枠が終わってしまっている時に相談に来られても……。そういうところからもコミュニケーションが薄れて……。」

学生1「先生と学生の間でうまくコミュニケーションが取れていないようですね。今後はまず研究室だけでなく授業の後などに先生方も気に掛けて話してもらえたらと思います。また僕たちのほうから先生方に積極的に声をかけられたらと思います。その時は先生方やさしく接してくださいね。」

司会「何となく結論のようなものが見えてきましたが、残念ながら時間がきました。本日はお忙しいところありがとうございました！」

この後、先生や学生達は思い思いに部屋を後にしていった。少しばかりみな顔に清々しさが感じ取れた気がした。先生と学生の接点は、授業と研究室だけ。その“だけ”をどうにかしていかなくてはいけないと思いました。今回の討論がそのきっかけになればと思います。



静電容量型変位計・超音波リニアモータの輸入販売

*Progress & Creativity*

**ピーアンドシー株式会社**

〒150-0013 東京都渋谷区恵比須1丁目20番8号  
(エビススバルビル5F)

電話 (03) 5793-1561 ファクシミリ (03) 5793-1562

昭和35年卒 代表取締役 安達昭郎



## 会費納入者名簿

<b>昭和12年卒</b>	浜田 勝伸	廣田 博	新谷 勤	小林 國平
市川 哲郎	<b>昭和21年卒</b>	古舘 和夫	竹村 政一	近藤 鍊太郎
<b>昭和16年卒</b>	石川 幸一	吉田 耕一	椿山 雄久	寺島 賢治
天野 章	小松原 正夫	<b>昭和26年卒</b>	徳永 静	古川 新
樫村 正久	下河原 一恵	植村 治	中村 幸雄	松田 誠一
佐藤 六郎	杉山 忠次	太田 精一	平田 佳邦	森 康男
松田 稔	中谷 宏	川西 正人	福島 敏郎	<b>昭和31年卒</b>
中川 啓一	松本 健次	小島 和夫	牧 宏	飯沼 嵩
中村 孝次郎	<b>昭和22年卒</b>	五味 啓次	牧野 迪正	川口 國雄
和田守 哲治	稲垣 義雄	鈴木 信夫	三田 郁夫	君塚 齋
<b>昭和17年卒</b>	大森 威男	田中 幸徳	村上 全司	小池 久則
小川 守三	小林 利孝	平田 達男	山口 猛	小松原 彬
佐藤 恒男	滝北 博	<b>昭和27年卒</b>	<b>昭和29年卒</b>	小宮 順子
<b>昭和18年卒</b>	増淵 昭敏	石田 宏	浅川 和昭	齊藤 公福
大木 天材	三川 清治	市川 次良	石井 喜悦	中 嘉久
川上 利富	森山 晶生	入倉 芳郎	井出 道明	廣橋 亮
小林 和夫	<b>昭和23年卒</b>	植松 貢	井上 秀雄	村山 政敏
平田 好顕	伊東 達郎	片岡 英世	坂本 和佐	安田 信人
吉永 利男	上野山 高正	木下 眞喜雄	瀧谷 俊雄	<b>昭和32年卒</b>
<b>昭和19年卒</b>	種垣 止	坂田 吾朗	田中 昭二	網代 良太郎
浅野 良哉	増田 巖	坂本 勉	谷川 清	石渡 正夫
菅 秀夫	南林 弘和	外山 研次	中村 百樹	伊藤 道夫
玉置 弥栄	山下 登	高田 芳行	長山 勝政	江部 明夫
筑紫 宗光	<b>昭和24年卒</b>	林 貞吉	奈良 高雄	工藤 富司
室岡 東三	市川 二郎	松井 孝	藤波 篤郎	小谷 豊
脇 幹夫	入江 文郎	宮川 継男	米田 虎雄	渋谷 六郎
<b>昭和20年卒</b>	宇田 公德	室住 正人	米山 廣保	東海林 正
畦元 直三郎	小倉 契秀	和井内 徹	<b>昭和30年卒</b>	園田 勲
天埜 安郎	加藤 泰正	<b>昭和28年卒</b>	池田 忠良	竹内 孟
磯 基道	下田 清隆	岩崎 晃	植竹 和也	竹原 晃
伊藤 和雄	<b>昭和25年卒</b>	浦島 敬吉	奥谷 忠雄	田中 保
小口 敏太郎	市川 安邦	柏木 治彦	笠間 三男	田村 浩司
神本 慶助	尾高 陽一	木代 辰雄	加藤 五郎	坪井 聰可
杉浦 銀蔵	黒須 朗雄	栗田 秀男	金井 孝道	野村 亀利

村松 勉	梶原 康敬	松本 規雄	西山 孝彦	丹野 隆善
矢作 栄甫	河合 哲次	<b>昭和37年卒</b>	藤野 裕	西脇 鉄雄
<b>昭和33年卒</b>	倉形 邦英	石岡 龍右	渡部 長幸	幡野 匡彦
青山 功	佐久間 恒和	伊地知 龍清	<b>昭和39年卒</b>	三谷 治郎
高木 三郎	神宮司 弘	磯崎 昭徳	安藤 輝治	向井 重雄
稲田 欣一郎	関口 勝	井上 靖治	植木庄左衛門	<b>昭和41年卒</b>
永井 滋	高尾 俊行	奥山 正之	遊佐 勝見	相見 光郎
加賀 勘之助	高野 俊彦	梶山 秀矩	小屋原 英雄	石原 祥江
岩沢 實	高橋 健一	銀林 博	加藤 仁	今村 晃一
五十嵐 輝行	西島 泰世	倉澤 守雄	亀村 轟	上林 直也
才木 義夫	原 幹夫	小谷 嘉孝	斉藤 守罔	楠 勝行
三浦 修	丸山 長資	小林 昭朗	齋藤 博之	佐藤 良和
守屋 伊佐雄	宮本 貴	駒井 俊雄	佐藤 良博	重田 勲次
斉藤 二郎	村川 信子	斎藤 一郎	嶋津 万里子	嶋田 晋廣
大井 壽	山本 成也	佐々木 賢明	瀬尾 直朝	高桑 豊
中島 眞喜雄	米田 修一	庄司 翠	高橋 清	舘 敏夫
柏崎 敏郎	渡辺 高章	杉崎 秀夫	高間 伸一	白竜 美津夫
富士田諄一郎	<b>昭和36年卒</b>	田村 英雄	高松 武生	平井 栄司
平野 幹雄	石井 四郎	津崎 信隆	武井 博正	藤池 誠治
<b>昭和34年卒</b>	石井 照明	土屋 宏一	竹石 常	藤池 曠子
池田 実	宇賀治 正名	広瀬 丈久	武田 幸久	真下 清
伊東 明男	越智 健二	望月 栄一	田原 恭一	丸山 武紀
牛込 力夫	門井 守夫	茂出木 義雄	寺山 洋子	村井 直樹
栗原 孝夫	仮戸 斌	<b>昭和38年卒</b>	中野 洪	安江 任
児玉 五男	栗村 規雄	井野 二陸	野尻 義雄	矢野 鎮雄
玉置 憲三	河内 宗弘	白石 益郎	原 襄輔	芳崎 弘一郎
野原 豊	越田 明保	岩本 文男	堀 是治	<b>昭和42年卒</b>
藤森 信正	斎藤 博	大石 哲	本多 清一郎	飯原 折越
茂出木 久義	崎下 昌道	大村 俊晴	渡辺 進作	稲川 栄一
横倉 隆康	佐藤 貞男	栗田 公夫	<b>昭和40年卒</b>	大川 清宏
横山 仁夫	鈴木 善次郎	酒井 誠一	上野 公雄	佐藤 馨
吉川 和男	砂川 憲二	杉田 松中	上條 陽一郎	栃木 勝己
<b>昭和35年卒</b>	炭田 幸宏	竹内 栄多	小泉 正男	富田 潤一
安達 昭郎	中田 彰弘	中澤 隆夫	笹子 謹一	能代田 順久
尾崎 武二	中村 紀忠	長嶋 潜	清水 博太郎	橋本 廣雄
小見川 健	野村 友次	永田 正巳	竹森 徹	古阪 一昭

山崎 博	松村 清利	土岐 正史	前山 龍一郎	石川 恵子
柳 脩一郎	<b>昭和47年卒</b>	深澤 豊史	<b>昭和59年卒</b>	小川 誠
<b>昭和43年卒</b>	斉藤 菊夫	<b>昭和53年卒</b>	小高 眞弓	菅野 元行
浅井 保雄	森 伸一	浅川 徹	観音寺 信夫	野手 勝美
海上 幸三	<b>昭和48年卒</b>	荒川 昇	清水 繁	福原 信一
佐藤 精二	秋久 俊博	植松 一郎	原 三智夫	吉野 早苗
進藤 宣昭	新井 公人	原田 茂	平木 登	<b>平成3年卒</b>
山梨 乾一	加来 文隆	<b>昭和54年卒</b>	<b>昭和60年卒</b>	敷野 修
<b>昭和44年卒</b>	川津 義人	浅野 祥司	飯田 隆久	橋本 徳子
石山 利男	坂口 信昭	榎本 充男	酒井 一徳	三浦 恭彰
大川 洋	櫻川 昭雄	大野 正博	鈴木 義弘	<b>平成4年卒</b>
岡本 彬	指田 紀男	小笠原 幸道	<b>昭和61年卒</b>	宮崎 裕子
関口 信夫	関口 優紀	佐野 謙一	磯崎 勉	藤池 一誠
花井 秀之	安岡 徹	塩澤 治彦	小嶋 芳行	加来 洋子
森田 尚	渡辺 明典	杉田 健一	那賀 恵美子	吉野 徹
八幡 順一	<b>昭和49年卒</b>	鈴木 昌三	高岡 幸夫	<b>平成5年卒</b>
横山 二郎	小島 元昭	谷藤 善美	萩原 俊紀	村原 伸
渡辺 光仁	佐藤 哲	諸原 浩	福元 俊之	<b>平成6年卒</b>
<b>昭和45年卒</b>	澤口 孝志	<b>昭和55年卒</b>	<b>昭和62年卒</b>	石黒 香織
大木 実	沢崎 芳男	赤津 典昭	勝又 雅子	遠山 岳史
加村 尚喜	嶋村 典和	池田 実	加藤 慎次郎	藤池 亜紀子
川崎 明男	三宅 久利	松島 浩	栗田 直人	高橋 健児
小林 満	<b>昭和50年卒</b>	<b>昭和56年卒</b>	富塚 吉弘	佐藤 順一
滝戸 俊夫	上田 賢二	赤津 典昭	<b>昭和63年卒</b>	忍足 優子
田中 硯	関口 真理	池田 実	石井 睦子	<b>平成7年卒</b>
土田 久	鶴田 正之	松島 浩	長岡 美佐子	安倍 聖子
永島 一男	細谷 博邦	<b>昭和57年卒</b>	中西 剛	餌取 直樹
宮内 和司	<b>昭和51年卒</b>	伊藤 和宏	中道 幹芳	岡田 賢識
森崎 正美	浅羽 敏昭	江田 久雄	三井 宏	諏訪 智之
山田 達雄	梶 公一	田中 通洋	森田 孝節	田中 一明
<b>昭和46年卒</b>	森 弘通	中村 宏昭	<b>平成1年卒</b>	谷合 哲行
小谷 将彦	<b>昭和52年卒</b>	文野 理恵子	會田 直喜	<b>平成8年卒</b>
斉藤 政久	阿部 健弘	<b>昭和58年卒</b>	栗田 雅子	石井 秀和
三瓶 辰一	井上 久	岩崎 好高	黒田 美和子	湯浅 貴之
島津 学	最勝寺 公英	栗原 清文	坂越 剛	<b>平成9年卒</b>
松居 孝義	佐藤 祐二	前川 雅昭	<b>平成2年卒</b>	浮谷 基彦

酒井 佳恵	平成12年卒	瀧澤 慶子	平成16年卒	現3年生
林 秀憲	伊藤 穂高	塚野 美紗子	伊藤 秀憲	後藤 裕幸
平成10年卒	藤田 尚之	日野 隆	伊東 繁	小林 万里子
藏並 潤一	平成13年卒	村田 純子	小川 智美	永松 正好
細田 武文	小島 正浩	平成15年卒	熊谷 彬	その他
平成11年卒	長谷川 雄二	青柳 健一	最上 尚行	平野 勝巳
伊東 正和	平成14年卒	上原 愛花	田代 哲也	だいか会
樋口 孝夫	桑田 孝幸	小高 めぐみ	谷川 俊晶	PS会
松田 弘幸	駒込 千加	根木 隆之	鳴瀧 紘一	
渡邊 圭司	佐々木 俊介	藤田 泰	山田 剛也	以上511名

## お 知 ら せ

### 平成17年度の行事予定

5月下旬 工化会総会（詳細は秋久 TEL:03-3259-0806 にお問い合わせ下さい）

7/16(土) 一日体験化学教室

7/31(日) オープンキャンパス

連絡先

- ・工化会及び会費に関する問合せ→庶務(安江 TEL:03-3259-0797)
- ・住所変更に関する問合せ→会員(滝戸 TEL:03-3259-0800)
- ・工化時報に関する問合せ→会報(澤口 TEL:03-3259-0819, FAX:03-3293-7572, E-mail:jihou@chem.cst.nihon-u.ac.jp)

### 広 告 募 集

工化時報では会社広告及びクラス会・同窓会報告を募集しています。掲載の詳細につきましては会報委員会までお問い合わせください。

掲 載 料 1 年 : 10,000円

### 発 行 所

東京都千代田区神田駿河台1-8

**日本大学理工学部工化会会報委員会**

◎伊藤和雄, 永島一男, 小川 誠, 橋本徳子, 澤口孝志,  
石黒香織, 谷川 実, 遠山岳史, 平野勝巳, 森田孝節

学生編集委員

M1 八巻志帆

4年 飯島千奈美, 大貫将司, 海東淳子, 岸野雅也, 北谷戸尚,  
小菅将彦, 桜井祐輔, 鈴木健太, 高木裕輔

3年 井上洋明, 上原麻美, 小倉洋介, 加藤里香, 柴田洋一郎,  
廣瀬達也, 富樫恭輔, 三浦義之

2年 珍田愛子, 中川友希, 名取美菜子